

Miss Ogilvy は shell-shock に何を見たか

Radclyffe Hall, *Miss Ogilvy Finds Herself*

林 美 里

はじめに

両大戦間の狭間で揺さぶられるレズビアンの心状を表したわずか20ページほどの短編小説 *Miss Ogilvy Finds Herself* (1934) は当時精神分析に関心の強かった作者Radclyffe Hallが人間の意識下に内在するものを彼女の精神学研究をもとに表現しようと試みた実験的作品である。また彼女の代表作に、英国小説史上初のレズビアンを真っ向から題材に扱った小説として一大センセーションを巻き起こした *The Well of Loneliness* (1928) がある。*Miss Ogilvy* が出版されたのは前述の通り1934年だが、実際の執筆はその8年前の1926年に行われた。*The Well* の執筆より2年ほど早いこの短編は登場人物のキャラクタライゼーションや時代・状況設定などが *The Well* の特に戦争時代の34章と非常に似通っている。そのため *Miss Ogilvy* は、*The Well* のプロトタイプとする見方が強い。彼女の作品の中でも比較的重要な意味合いを持つこの作品内において、Hallは当時流行した戦争後遺症Shell-shockという言葉を繰り返し登場させている。このshell-shockというキーワードは作品内でどのような役割を果たしているのであろうか。今回はHallの精神分析へ傾倒していったその経緯と、作品内に表れている主人公Miss Ogilvyの心状を追いつつそのキーワードの意味を解釈していきたい。

Hallの心理分析への傾倒

1. The Society for Psychical Research

*Miss Ogilvy*の中で展開される不思議な夢はHallの精神分析に対する強い関心から成り立っている。彼女の伝記、*Radclyffe Hall: A Woman Called John*の著者Sally Clineによれば、著名な内科医であった祖父のCharles Radclyffeは当時発表された新しい催眠療法に傾倒し、1845年新催眠療法に関する連載記事を*Jancet*に寄稿した¹⁾。祖父の影響を強く受けたHallはまた精神分析の世界に若いころから魅了された。Hallが研究を本格的に始めたこの時期はLadyeの影響でRoman Catholicismに改宗したもののRoman Catholicの自分の倒錯行為や当時またのめり込んで来たテレパシーなどの超現象などを肯定するspiritualismとの協議上の対立で悩んでいた時期であった。悩みの糸口を現実的な、科学的に解釈可能である心理分析に見出したのは自然なことだったのか

もしれない。1916年に精神学の研究を開始し、1918年にThe Society for Psychical Researchに第二次女性会員として加盟し、祖父の理論を更に展開させるべく精力的に活動した²⁾。その活動内容は協会から“intelligent, cautious approach³⁾”と賞賛されたが、Hallは必ずしも全ての会員に受け入れられていたわけではなかった。会員になる直前に亡くなった最初のパートナー Mabel Veronica Batten (Ladye) とのスキャンダル、Lady Una Troubridge と共の活動は一部の会員にとっては理解の境地を超えるものだったようだ。学会最中、夢に関する議論においてUnaは以下の発言をし、物議を醸したという：

Dr Dingwall saw the Chairman's mouth drop open with shock as Lady Troubridge recounted a dream of hers starting with the sentence: 'Last night I had a most strange dream so I turned to John and said, "Darling, I've just had such a dream."' (144)

これはHallが*The Well*で同性愛の性交を始めて明確に表現した“and that night they were not divided.”(316)と同様の間接的な言い回しであるところが興味深い。現代の感覚で見ればかなりの婉曲的表現であるが、議長含む同席した会員たちには衝撃的だった。

1-2. Hallと精神学

同性愛者にとって如何に社会に自分たちの存在を認知してもらうかは大きな課題であるが、Hallは科学的側面から自分たちの公正を立証しようと試みた。彼女が影響を受けた性科学の分野にはキーパーソンとしてKarl Ulrichs (1825-95), Richard von Krafft-Ebing (1840-1902), homosexualityに‘uranism’という新造語を充てたEdward Carpenter (1844-1929), Magnus Hirschfeld (1868-1935), それとHarvelock Ellis (1859-1939)の5人がいるが、特に同国に住む心理学者で、女性で作家業もしていたHavelock EllisにHallが共感する所は多かったようだ。Ellisの代表的研究に1897年から1928年の9年間に渡って発行した“Studies in the Psychology of Sex”がある。Hallは第1巻が出版されてすぐに彼女の著書を読みあさった。Ellisは研究著作の中で一貫して同性愛は先天的なもので矯正は不可能という主張をしていた。Hallがその後の作品においてレズビアン肯定をこの理論に頼った所は大きい。それまで同性愛は後天的な不道德なものとしてされ、矯正が可能と信じられていた。同性愛指向は神によってもたらした自然なものとするれば、同性愛に対する社会的容認も受け入れられやすくなるし、宗教的折り合いもつきやすくなる。*The Well*で彼女は序章用のコメント執筆をEllisに依頼した⁴⁾。また本文では以下のようにぐだりに主人公Stephenの父親Sir William Philipが娘の異常な性癖を調べるため心理学の文献を読んだ箇所が挿入されている：

Then she noticed that on a shelf near the bottom was a row of books standing behind the others; the next moment she had one of these in her hands, and was looking at the name of the author: Krafft Ebing-she had never heard of that author before. (207)

これは同性愛という性癖をこの理論から人々に許容してもらいたいHallなりの理想を常識人であるPhillipに込めた結果だと考えられる。

1-3. Hallの作品におけるEllisとFreudの存在

さて今回中心的に取り上げる*Miss Ogilvy*であるが、*The Well*のプロトタイプの小説なのにこ

の作品の中には同性愛に対する社会的認知を求める積極的な姿勢より、むしろ戦争という緊急事態を挟んで振り回される性倒錯者たちの悲劇を憂う姿勢で描かれている。Hallが自分の執筆活動にFreudの文献を参考にしたという記述は残念ながらどこにもないが、最後のパートで出てくる摩訶不思議な夢の物語に、読み手はそこにFreudの夢に始まる心理分析との関連性を疑いたくなる。

“The Resistant Social/Sexual Subjectivity of Hall’s Ogilvy and Woolf’s Rhoda”のMichael Krampが説明するに、精神学内において大きな存在と位置を占めるFreudの基本的理論では、全ての人間はheterosexualとhomosexualが同時に存在するということだが、その中で彼はレズビアンという種属を発展途上の‘normal’な女性という見方をしていた⁵⁾：“Freud’s theory ultimately regards lesbians as heterosexual women who need proper clinical attention; in other words, he presents them as broken subjects in need of psychoanalytic repair” (30)。

つまりFreudによればレズビアンは本人の努力次第でヘテロに軌道修正が可能という主張である。これは同性愛は先天的なもので強制は不可能という主張のEllisとは正反対の理論でレズビアンの存在を容認してもらいたいHallには不利な理論であった。だが、当時の西欧ではFreudの理論は強い影響力を持っていた。作品のラストで不思議な夢を見たMiss Ogilvyが死体で見つかるのは、Freudの思想が支配する夢の世界ではOgilvy始めレズビアンは生きてゆくことが出来ないとHallは警告したかったのではないだろうか。

Shell-shockの社会的影響

1. Shell-shockという言葉の時代的認識の推移

*Miss Ogilvy*の中で1つのキーワードとなるshell-shockという症例に関する時代的認識の移り変わりを見ておきたい。産業革命の時代、鉄道の技術の進歩でよりスピードが上がると、一方でその騒音などが原因で人々が体調の不調を訴え出した。そこから発生したとされるshell-shockはまだ正式な名称こそ決まっていなかったものの、“engineer’s malady”として労働者に支払われる保険の適応内に入るか否かの問題としてとりあげられ、注目を集めだす。1857年E.A.Duchessによる“On the Railroads and their Influence on the Health of Engineers and Firemen”に最初のshell-shockの研究がなされている⁶⁾。

それまで工業病のカテゴリーにいれられていたShell-shockが現在の主症状、戦争での主に砲弾等の爆撃のショックなどの極度のストレスによって情緒不安定になるという戦争後遺症に変化したのはアメリカの南北戦争後のことだ。多くの神経症に侵された兵士の報告が前線から寄せられ、この時期にSilas Wier Mitchellによって確立された治療法は後のShell-shockの治療法の基礎になっている⁷⁾。第二次産業革命後、ドイツのKrupp社、イギリスのVickers社のような兵器製造の大企業を筆頭に兵器自体も進化し、より大きな打撃を与えるようになった。戦争のスタイルも敵同士顔の見える戦いから、見えない遠方からの予測できない爆弾の奇襲のスタイルに変わり、いよいよShell-shockにかかる兵士が増え、社会的にこの病名が知れ渡るようになった。

2. Shell-shockを扱った他の作品の例

2.1 . Virginia Woolf, Mrs. Dalloway

ではこのShell-shockが当時どのように認識されていたか、Hall以外にShell-shockを作品内に取り上げたVirginia Woolfの例を取り上げてみようと思う。

戦争の爆撃のトラウマはまず、患者の生活における基本的な信頼関係を疑問視させる。*Trauma and Recovery*の著者Judith Hermanによれば、Shell-shockのようなトラウマの一次効果は、被外傷者の心理的構造の破壊だけで無く、人間関係の破壊も含まれるという⁸⁾。恐怖状態に陥った患者は再び基本的信頼を回復しようとまず、母親や神のような庇護的存在を求める。それが得られない場合、患者の基本的信頼感は粉々に砕け、この世から外に放り出されたような大きな疎外感を味わう。社会的死と同様、患者は死の世界に属しているといえるかもしれない。

WoolfのMrs. Dalloway (1925)には友人が目の前で吹き飛ばされて戦死したショックのために無感覚になり、幻覚と強迫観念に苦しみ自殺するセプティマス青年が登場する。Woolfは内的荒廃感を抱くセプティマス青年をこのように巧みに描いている：

This was now revealed to Septimus; the message hidden in the beauty of words. The secret signal which one generation passes, under disguise, to the next is loathing, hatred, despair. [...] One cannot bring children into a world like this. One cannot perpetuate suffering, or increase the breed of these lustful animals, who have no lasting emotions, but only whims and vanities, eddying them now this way, now that. [...] For the truth is [...] that human beings have neither kindness, nor faith, nor charity beyond what serves to increase the pleasure of the moment. They hunt in packs. Their packs scour the desert and vanish screaming into the wilderness. (67 68)

2.2 . Sigmund Freud

Freudの“Thoughts for The Times on War and Death (1915)”は第一次世界大戦後ヨーロッパを被った深い幻滅感に刺激されて書かれたものである。彼はこの中で、戦争の幻滅は二つの原因により起こったとしている。1つは内に対しては道徳的規範の番人としてふるまう諸国家が、外に向かったときに示す道徳性の欠如、もう1つは最高度の人間文明への参与者としての個々人がそのふるまいの中で示した、信じられない程の残虐性である。

彼はそれらの現象を以下のように説明する。人間に本来備わっている欲動諸活動には利己的活動や、戦争に象徴されるような残忍な活動などの原始的諸活動があり、それらは人間の築いた利益社会からは悪とみなされ、拒絶され抑制されている。しかし、「感情両価性」による反動が悪とされているものと善とされているものとを両立させる作用を持ち(例：恋愛に愛情と憎しみがある)、道徳性を尊ぶ現代人ゆえにそのギャップに戸惑うというわけである。また無意識下に人間は自分の死を思い描くことを拒む代わりに、見知らぬ人に対して殺意を抱き、愛おしい存在の者に対しては分裂的(両価的)態度をとる。これは原始時代の人間同様の心象であるとしている⁹⁾。

戦争という大きな衝撃により、深い絶望と幻滅に色塗られた両大戦時、Miss OgilvyやStephen、そしてHallのようなレスビアンにとって戦争はどのような影響を及ぼしたのだろうか。次にMiss Ogilvyの作品から気になる下りを数点取り上げて主人公Ogilvyの心理的動揺とその要因を

探ってみたい。

作品から見るOgilvyの心理的動揺

1. 自己完結できる世界の欠落

Miss Ogilvyのようなレズビアンにとって戦争の終結は自分たちの幻想の終結であった。フランスの前線で勇ましく活躍したOgilvy率いる女性救急小隊は解散を余儀なくされる。活発な女性隊員全員は戦争という臨時体制が解除され、自分たちの活躍の場を奪われた深い寂寥感が章全体に漂っている。小隊を指揮していたOgilvyももちろん深い寂寥感を味わっていた。ここで興味深いのはHallの車に対する扱い方である。皆が帰国するのに心を重くしている間、Ogilvyの愛車まで帰国を拒むかの如くなかなか動かず搬送人が運搬にてこずっている。Hallはここで車を隊員同様、同志とみなして以下のように車をなだめる印象深い下りがある：“--and she turned and patted the gallant old car as though she were patting a well-beloved horse, as though she would say: ‘Yes, I know how it feels -never mind, we’ll go down together””(86)。

これと似た関係は*The Well*にも描かれている。これにはレズビアンの最終的には報われない恋の代替として完全な愛情を注ぎこめる対象を置きたいHallの意図があるようにみえてならない。完全な愛情を注ぎ込み、その対象と一心同体になる。そして自分の心象をその対象に映し出す。この作品では車の登場はさほどウェイトを占めていないが、*The Well*の場合は最後怪我をして動くことの出来なくなったRafteryに銃を向ける。Rafteryはただ主人の意向を無条件に受け入れる：

‘I’m going to send you away, a long way away. [. . .]. Raftery, this is death; and beyond, they say, there’s no more suffering. “She paused, then spoke in a voice so low that the groom could not hear her:” For give me, Raftery.’ [. . .] Then it seemed to Stephen That he had spoken, that Raftery had said: ‘Since to me you are God, what have I to forgive you, Stephen?’(232 233)

RafteryにとってStephenは唯一神であり、そこにStephenは自己完結できる自分だけの世界を見出す。

*The Well*や*Miss Ogilvy*など、Hallの作品内の恋愛は対象に対して支配に近い主導権をとるスタンスが読み取れるが、これは性的倒錯者の存在と同様、女性の性的主体性を社会に認知させた主張の一環に組み入れられる¹⁰⁾。

今回の作品内ではOgilvyの車はStephenのRafteryの関係にまでは確立できなかった。対象を見出せなかった代替としてHallは自己完結の世界を最後の晩に見る夢の中に見出すのだが、これに関しては後ほど述べることにする。

2. 偽りの病

一人身で終戦後恋人とハネムーンに行ったStephenとは違ってMiss Ogilvyには面倒を見なくてはならない家庭があった。ここで興味深いのはヒステリーを装う妹、SarahとFannyの姿だ。どんな激しい戦いでも恐れを知らず勇敢に活躍したOgilvyが自身をshell-shockを疑うようにな

ったのは、彼女の2人の妹のヒステリー騒ぎが一因にある。

彼女たちのヒステリーは当時の時代的背景、大戦で男性の数が不足し未婚女性が急増していた問題に起因する。自活する能力のない妹たちは社交界で必死に婿探しをするものの結局見つからなかった。そして父親が財産をほとんど残さずに死亡。後に叔母から遺産を譲り受けたOgilvyに寄生せざるを得なくなった。人生の負け組の感は残り、彼女たちは常に不満を抱きつつ生活している。その間にもヒステリーに近い症状は出ているが、戦争が始まり頼りの姉が海外へ旅立ってしまうと基本的な家庭内の事務すらこなすことができない彼女たちは更に不安を募らせる。Ogilvy帰国後の彼女たちのヒステリーは、拠り所が無くなっていった心細さが一気にOgilvyに向けて爆発した形である。当然、彼女たちの自己中心的態度にOgilvyは辟易する：

When Miss Ogilvy returned to her home in Surrey it was only to find that her sisters were ailing from the usual imaginary causes, and this to a woman who had seen the real thing was intolerable, so that she looked with distaste at Sarah and then to Fanny. Fanny was certainly not prepossessing, she was suffering from a spurious attack of hay fever(90)

またOgilvyはそれまで自分がいたフランスの自由さと違ってイギリスの田舎であるSurreyの家での生活の閉塞感に苛立っていた。近所づきあいの苦手な彼女は地元にも馴染めない。この頃から彼女の自前の癩癩が激しくなる。そして彼女に決定的に打撃を与えた事柄が一番信用していた部下に裏切られた次の事件だ：“Oh, Well ... here we are...” Miss Ogilvy would mutter. But one day the girl smiled and shook her blond head; ‘I’m not - I’m going to be married’”(92)。

*The Well*と*Miss Ogilvy*との決定的相違はこの下りだろう。それまで異質な女性というレッテルを貼られ無視されて息を潜めるように生きてきたOgilvyのような女性逸脱者は、開戦と共に活躍の場を与えられ、自分らしく振舞うことを社会に臨時的に認められた。そんな幻想に近い理想の期間を経て、また再び共に戦った盟友と引き続き関係を築いていけるか、それとも完全に離別してしまうか。Stephenはそこで最愛のパートナーとなるMaryと出会い舞台は一番幸せな物語へと紡がれていくが、Ogilvyの場合はここで、一旦手に入れかけた自分たちの自由を時代の感覚の逆行と共に諦め普通の女性として結婚の道を選ぶことにした盟友との離別を体験する。彼女は完全に孤立無援になる。まだ若く精力的なStephenとことなりOgilvyは58歳と初老に差し掛かり、時が全てを解決するといった楽観的思考を持つには既に余裕がなくなっていた。彼女の未来に漂う絶望感。苛立ちはますます強くなり、ついに危険を自覚するほどになる。無意識であるものの、彼女自身もまた妹と同様本来の要因とは異なる神経症を擬似体験するのである：“Alone in her study she had suddenly shivered, feeling a sense of complete desolation. [...] ‘I must be ill or something,’ she had mused, as she stared at her trembling fingers”(92)。

自分の異常に動揺したOgilvyは現実逃避の場所を求めて旅に出る。Devonの南諸島に旅するものの、そこでも彼女は不思議な体験をする。始めてきた地であるのにも関わらずかつて自分がここに住んでいたかのように完璧に記憶している地形の情報。そして宿泊先で仲良くなった宿の女主人がこの地で発掘した物をぞんざいに扱っているのを目撃して、突如押さえきれぬほどの大きな悲しみがこみ上げるとOgilvyは自分でもその状態が理解できなくなる。慌てて自室に戻ると出征先で好んで吸っていたフランス産のカポラルタバコを精神安定兼ねて口にくわえると次第に意識を失う。彼女の最後に見た夢はどのような意味を持つのだろうか。最後にこの作品のクライ

マックスにあたる夢のパートについて分析してみたい。

3. Ogilvyが最後の夢に何を投影したか

Ogilvyが心身の疲労を癒すため孤島に旅に出るという筋は、Hall自身の体験ではなく、彼女のパートナーとなったUnaの経験から起草されたものであるようだ。Radclyffe Hall: *A Woman Called John*の著者Sally Clineによると、Unaは倒錯傾向はあったものの、Hallと出会うまでは結婚して一子も儲けていた。しかし、1909年に第二子が流産してからUnaは精神的に疲弊し始めた。夫に対しても何もかもに対して無気力になった彼女は催眠療法を受けるためマルタ島まで行った経験がある¹¹⁾。また最初の章でふれた通り、The Society for Psychical Researchでの夢の議論においてUnaはHallに変な夢を見たと言っている事実がある¹²⁾。

戦争はOgilvyのような女性倒錯者にとって一時的に活躍の場をもたらした儚い幻想であった。終戦になり、その幻想から現実社会に無理矢理引き戻された時、自分たちの活躍が社会に無視され、世の中は何もよい方向に動いていないことが分かる。その他個人的に味わう様々な絶望を経て、彼女の中に芽生えた葛藤が、かつて自分たちが活躍の場を与えられたフランスの戦地のような新たなフロンティアを再び得ようとOgilvyを孤島へと駆り立てたのかもしれない。しかしその島でも新たに感じる不自然な感情に、Ogilvyはいまだ自分の心の中の問題が解決されていないことに気付かされる。その状況で彼女が一生の終わりに見る夢にHallはどんな意図を込めたのだろうか。

まずあらすじを追ってみることにする。Ogilvyの見る夢は遙か古代の若い男女の夢である。女のほうはその一族の長の娘で、父親は娘と結婚する相手の条件に強さを求めている、そのため、まだそれほどまでに力の至らないその男は娘との結婚を許されていない。二人は深夜、村はずれの暗い森の中で密会する。仲良く遊んで、疲れて横になっていると、男がこの村を襲おうとしている何か巨大な（海から来ているとの表記で、津波のような表現であるが、明確には表記されていない）ものの存在についておびえ出す。女はその気配を感じる事が出来ない。女が男を安心させる。それから男はさらに、Roundheaded-oneという恐らく別の集族の襲来（彼らよりより高度な技術を持っていて、石器ではなく鉄器を所有する）を感じとる。それでも男は女を話さないと女に約束し、女はこっちもそのような場合は応戦すると約束、二人共互いの愛を確認しあう。男は女を抱えて、とある洞穴へと連れ出す。男が女を押し倒そうとする時、女は拒絶する。しかし、男は更に力で制しようとする。敵の襲来にもかかわらず、男は武器を外し、あたかも死を覚悟しているかのようなようである。そこで、場面はフェードアウトして森の中の情景に変わる。

3.1. 最初の女性像に凝縮される人物

ここに出る登場人物の男女は、最初の登場時は1人で表わされていて、最初Ogilvyの頭に浮かぶ人間は女だったそこから、長身の男の像になり、横から美しい女の存在が出て来る。これは夢の作業における凝縮（condensation）で異なった人物が一人の人物に凝縮された例ではないかと考えられる。現実の世界で夢に直接的な影響を与えたと予想できる人間は主人公のOgilvyと彼女の妹2人、女主人と戦線ですぐに親しくなった同士が挙げられる。これら全員の印象が重なり

あってぼんやりとした輪郭となって現れたのがこの若い女性像である。ただし、この夢を見ている人間はOgilvy本人であるため、夢の主導権はあくまで彼女が握っている。また、最初1つの像である物が二人に分かれるのは、夢の物語のつじつまをあわせるための二次的加工（secondary revision）であり、従ってこの2人は別々に見るよりも同一人物として解釈した方が良くもかもしれない。

3.2．夢の中の男女

肉体的にはそれぞれ男女特有の特徴を持つ「らしい」人間であるのに対して、性格を見ると、通常男女に当てられる性格と逆の性格がつけられている。男の方は勘が鋭く、神経質。女の方は楽観的で気が強く、どちらかという単純な性格をしている。これはOgilvyの悩んでいたジェンダーについてのコンプレックス、今で言う性同一障害と連想付けられる。男女2人はOgilvyの精神内面のプラスとマイナスの両極であると見るなら、プラスは楽観的な性格の女であり、マイナスは神経質な性格の男である。しかし、男の方の性格にはOgilvy自身の本来持つ責任感や、知性が垣間見られ、女の方の性格には妹の持つ単純思考回路やホテルの女主人の楽観的でいい加減な性格等が見られる。女のイメージに潜在するのはOgilvyが現実世界で否定的な印象をもつ女性の複合イメージ、また男のイメージには、Ogilvy自身とおそらく戦線での同士の像が合わさって出来ているのではないだろうか。

3.3．島の洞穴

Ogilvyは不思議なことに島に来る前からその洞穴の存在を知っていた。また夢を見た翌日、彼女が死体で発見された場所も洞穴であったことから、夢の中で島の存在もまた重要になってくる。

洞穴は夢の中では男女が性交を試みようとした場所で、その際の洞穴の描写は女性器を連想した明らかに分かる程ダイレクトに表現されている。洞穴の中で行われた事は、夢の中で女は性交を拒絶し、現実世界ではOgilvyが死んだことである。ここであらためて、夢の中の男女はOgilvy一人のイメージの分断であることを思い出すと、性交を拒絶された男の方もその洞穴のイメージに含まれている。これはOgilvyの精神両極面の葛藤、現実世界で彼女の患っていた戦争後遺症に似た情緒不安定を表わし、彼女の見た夢全体に表現される不安感を象徴している。最後の洞穴の中での性交に関する葛藤、つまり性交＝二つの者が合わさるイメージは、女性のアイデンティティーに悩むOgilvyの解決の1つの手段である、女性倒錯者にとって理不尽な現実社会を妥協して受け入れることのイメージとつながるのではないだろうか。そして結果彼女の心の中で妥協が出来ないことが、夢の中での性交の不成立を示し、最終的な実際のOgilvyの死と結びつけられていると考える。

まとめ

以上を見てみると、*Miss Ogilvy*はShell-shockという言葉はWoolfらが作品内で用いたような本来の戦争後遺症の意味とは別の使い方がされているのが分かる。開戦当初徴兵対象から除外さ

れている自分を憂い、“If only I were a Man(89)”と叫ぶ主人公の姿があるが、*Miss Ogilvy*の扱うshell-shockとともにヒステリーはそんな叫びのように、男性以外に活躍の場を与えない社会に対する彼女の心の中の葛藤を象徴するものだった。

Ogilvyは女性も一人の人間として認知されるべく自ら立ち上がり戦中果敢に努力した。しかし、任務終了後の彼女が経験したものの派はそれまで彼女が必至で擁護しようとした女性に対する幻滅だった。まずは一家の主人として擁護しなくてはならない妹たち。当時の典型的女性の持つ野心、玉の輿にのる夢が実現しなかった事情を、自ら何も行動を示さず、ひたすら受動的な態度で悲観にくれるだけの彼女たちのずるい姿勢。また戦中の一時は勇気を出してOgilvyの下に集まり共に活動したものの、最終的には社会的因習の結婚の道を選び、自分の元を去って行った同志。逃亡兼ねて訪ねたホテルの女主人の自己中心的な性格。またそんな彼女たち、特に妹のヒステリーを装う姿に嫌悪感を示しながら、実は自分も同様に仮の精神の病にかかる皮肉。Shell-shockという言葉には社会全体のみならずOgilvyの女性全般に対する想いと幻滅が込められているのである。

註

- 1) Sally Cline, *Radclyffe Hall: A Woman Called John*. London (London: John Murray, 1997) 13.
- 2) Cline 143.
- 3) Michael Baker, *Our Three selves: A life of Radclyffe Hall*. (Harmish Hamilton, 1985) 93.
- 4) Cline 237 8.
- 5) Michael Kramp, *The Resistant Social/Sexual Subjectivity of Hall's Ogilvy and Woolf's Rhoda*. (Washington: Rocky Mountains Review, 1998) 31.
- 6) Peter Leese, *Shell-shock: Traumatic neurosis and the British Soldiers of the First World War*. (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002) 15.
- 7) Leese 16.
- 8) Judith Herman, *Trauma and Recovery*. (New York: Basic Books, 1997) 51.
- 9) Sigmund Freud, “Thoughts for The Times on War and Death,” *The Standard Edition of The Complete Psychological Works of Sigmund Freud* 15, (London: Hogarth Press, 1957) 275 300.
- 10) そのもう一つの手段としてレズビアンたちの男性性を強調する試みがなされた。作品が発表された時代はまだ性的主体性が男性のみの特権だった。当時女性たちが性的主体性の主張を通しやすくするには、女性を男性化させる必要があった。結果Hallの作品にStephenやMiss Ogilvyなどのマニッシュ・レズビアンが登場したとみられる。
- 11) Cline 116.
- 12) Cline 115 6.

参考文献

- Cline, Sally. *Radclyffe Hall: A Woman Called John*. London: John Murray, 1997.
- Federman, Lillian. *Odd Girls and Twilight Lovers: A History of Lesbian Life in Twentieth-Century America*. Harmondsworth: Penguin Books, 1992.
- Freud, Sigmund. “Thoughts for the Times on War and Death.” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* 15. London: Hogarth Press, 1957, 275 300.
- Hall, Radclyffe. “Miss Ogilvy Finds Herself.” *The Penguin Book of Lesbian Short Stories*. Ed. Margaret Reynolds. Harmondsworth: Penguin Books, 1994, 84 103.

- . *The Well of Loneliness*. London: Virago Press, 1982.
- Herman, Judith Lewis. *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books, 1997.
- Leese, Peter. *Shell-shock: Traumatic neurosis and the British Soldiers of the First World War*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002.
- Kramp, Michael. *The Resistant Social/Sexual Subjectivity of Hall's Ogilvy and Woolf's Rhoda*. Washington: Rocky Mountains Review, 1998 <http://rmmla.wsu.edu/ereview/52.2/articles/kramp.asp> .
- Marlow, Joyce., ed. *The Virago Book of Women and The Great War 1914-18*. London: Virago Press, 1999.
- Mensh, Elaine, and Harry Mensh. *The IQ Mythology: Class, Race, Gender and Inequality*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1991.
- Murray, James A.H., et al. *Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1933.
- Souhami, Diana. *The Trials of Radclyffe Hall*. London: Weidenfield & Nicolson, 1998.
- Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. Oxford: Blackwell Publishers, 1996.